

<6月24日（金）-26日（日）第3戦第4戦レポート>

2016 D1 GRAND PRIX SERIES Rd. 3-4 TSUKUBA DRIFT

コースコンディション：第3戦ドライ→ウエット→ドライ／第4戦ウエット→ドライ

PACIFIC RACING TEAM with DUNLOP 野村謙選手（車両：NAC DUNLOP BRIDE ER34）

最終成績：第3戦・単走予選不通過／第4戦・総合12位

<本文>

前戦でひさしぶりのポイント獲得を果たした野村選手、こんどのラウンドは筑波サーキットで行われる D1GP 第3戦・第4戦デュアルファイナルズだ。金・土・日の3日間（金曜日は予選のみ）かけて2大会を行う。

野村選手は、前戦の富士で、角度をつけていくとあるところから勝手にパタンとカウンターステアが切れてしまう症状に悩まされたため、ナックルを変更してきた。また、事前テストの際にはハンドルがブルブル震える症状が出たこともあって、ステアリング系をひとつおとり交換して対策してきた。

練習走行1本目はそういったクルマの症状を確認。ひとつおとり問題ないことがわかり、仕上がりは上々のようだった。ところがいよいよ走りを組み立てようという2本目の練習走行でエンジンにトラブルが発生した。1気筒死んだような音が出て吹けなくなったのだ。その場でできることをいろいろ対処した結果、少しはましになったが、パワー感がないまま第3戦の予選出走を余儀なくされた。



第3戦単走予選。1本目はやや大振りぎみで86.08点。ボーダーラインは少なくとも96点台にはなることが予想されるため、厳しい展開だ。2本目は審査席に向かってくる見事なラインどりで進入してきたもののいかんせん車速が伸びず90.65点どまり。あえなく第3戦は予選敗退となってしまった。

しかし翌朝にはもう第4戦の予選が控えている。関係している補器類を可能なかぎり交換して不調に対処して臨むことになった。完全にではないものの、パワー不足があるていどは改善された。

ラッキーな面もあった。朝からの雨は上がったものの、まだ路面がウエットだったため、野村選手のスカイラインはパワーを食われることなくドリフトをつなげることができた。まずまずの車速を記録してリズムよく走り、さらにウエット路面のときに行われる得点のプラス補正が入ったこともあって、なんとか予選通過をすることができた。

そして日曜日。2番目に出走した野村選手だが、こんどはパワーが出きらないなかでも、見事なラインどりとスピードを落とさないすどい振り返りで98.49点をマーク。前半終了時点までトップを保ち、いち早く追走トーナメント進出を決めた。単走決勝の最終順位は7位となった。

第4戦の追走トーナメントに進出した野村選手、対戦相手はJZX100 チェイサーに乗る若手のホープ、松山北斗選手だ。しかし、単走ではドリフト中の車速が計測されるものの、追走では審査コーナーに入る前の加速力が重要になるため、エンジンが本調子ではない野村選手には厳しかった。1本目の先行時には、松山選手に寄せられてアドバンテージをとられると、2本目の後追い時には松山選手を捕らえきることができず五分の判定。2本のアドバンテージの合計でベスト16敗退となってしまった。

とはいえ、第2戦以降、マシンが完調なら十分に戦える実力を維持していることを証明した野村選手、エンジンはきちり直して真夏のエビス第5戦・第6戦デュアルファイナルズに臨む。



#### <野村謙選手コメント>

パワーが落ちてても、単走だとまだわかんないようにやれるんやけど、追走はもうね、ヘアピンのところで直線がちょっとあって、あそこでビューンっていかれる。相手もそんなに速いクルマじゃないと思うんやけど、それにもついていけなくて。まあ、しゃあないすね。でも、べつに年寄りが負けたわけじゃないですよ。おぼえておけ、コノヤロウっていうところばい(笑)。パワーさえ出てくれれば、クルマは全体的にはわりとよくなってきた。でもまあ、なんとなく、ひさしぶりに追走して楽しかったな。次はもうガッツリいったるバイ。『調子こくなよ、若者』みたいな感じでね!